

編 集 後 記

今年は記録的な暖冬の年であった。一時、東京ではついに雪の降らなかつた年になるのではないかと思われたが、3月中旬になって申し記程度の雪が舞う一日が記録されたようだ。2月中旬に、東京から上越新幹線に乗る機会があった。車窓から見える関東の山々はいずれも山頂にすら雪がない光景であったことを記憶している。3月になって気象庁が早とちりして桜の開花予測を訂正するということが起きたのもこのような今年の異常気象状況が影響したと考えられる。桜の開花予測となるソメイヨシノは最も有名な桜の種類であるが、大変デリケートな性質も持っているようだ。ただ温かい日が続けば開花するというのではなく、ある程度の寒さの時期を経過してから気温が上昇することが必要のようである。寒暖の気温の変化を感じるセンサーがあり、ある種のストレス蛋白遺伝子発現することで、見事なソメイヨシノの開花となるようである。一方、山桜の開花はソメイヨシノとは異なる。本州ではソメイヨシノが咲き終わったあとに山桜が開花するが、3月中旬に鹿児島に旅行してみると山桜が満開であるのにソメイヨシノの開花は4月1日予想とのことである。島国とはいえ日本は東西南北に長い国土をもつ。地域が変われば桜の開花順番も異なることがあることに気づいた次第である。そして、「春は はな、…」と日本の四季に謳われて日本を代表する桜にもいろいろな種類や性格があるという自然の奥深さに気づき恐れ入っている。

ここで、編集委員会という本会の基盤を支える大切な働きを会員全員にお知らせし、さらなる良質な論文投稿を御願いたい。日本消化器外科学会誌には毎年多くの論文投稿があり、編集の一役を担うものとして査読作業は大変な負担である。一方で、数多くの論文誕生に関わることになるので勉強にもなる。編集委員会メンバーは上西委員長を中心に献身的な働きをしておられるが、また、毎回の準備や当日の編集会議までお付き合い頂いている事務局の皆様の協力が在ってこの作業は成り立っている。本学会は昨年からは理事長制度に移行し、あらたな発展の機会を迎えている。今後国際誌の課題も再度話題になると思うが、本誌は和文誌として大切な役目を担っている。一般には「論文は英文でない」という傾向にあるが、何より論文作成で主張すべきことの明確性と科学的な論旨の展開とまとめ方を学ぶには日本語で論文を書くことも大いに意義が在るものである。

昨年、本学会の事務局が九段から現在の地に移転し、毎年この期の編集委員会で見ることが出来た「九段のさくら並木」を眺めることが出来なくなった。花見混雑を避けることができるがちょっと寂しさも感じられる今春の季節である。感傷に浸るのはこの程度にして、今年も新年度を迎え新たな気持ちで編集委員会に参加することとなる。毎年、季節の移り変わりを経て見事に咲く桜のように、今年もフレッシュで見事な内容の論文に査読で出会うことを熱く期待している。